

第10章 問題をもつ児童生徒の発見と診断

1. 問題行動とは

問題行動とは、広義にとれば、「何らかの観点から問題視される行動のことである」（生徒指導資料第14集 文部省）ということができるが、何らかの観点の考え方により異なってくる。すなわち、ある事態で問題行動とされた行動も、異なった事態では、そのようには認められない場合もありえることであり、問題とするかしないかは、その行動が出現した時の場面や、集団の規範性にかかわっているのである。たとえば、自由遊びの場面では活発で大変望ましい行動も、学習場面では活発すぎることがわざわざいって、逆に望ましくないとされるようなものである。また、個人的な意見や判断によっても影響されやすい。たとえば、ある教師は、もの静かで引っ込み思案の子供を問題をもつ子供とみないで、積極的で攻撃的な子供を問題視しているような例である。

このように考えてくると、問題のとらえ方は多義に考えられてしまう。そこで、ここでは、「子供が学業面・性格行動面・精神身体面等において、何らかの不適応を示す行動である」とおさえたい。

ここで、不適応とは、「欲求不満やかっ藤に対して、その処理に失敗し、生活上支障をきたした状態である」と考える。

2. 不適応の起こり方

人はいろいろな欲求をもって生活している。これらの欲求が満たされれば、心の緊張は解消し、適応した行動へと進む。それに反して、欲求が満たされないと、不満がつり、心の緊張が続き、いろいろな不適応行動となって現れるのである。

欲求が阻止される要因には、個人自身からくるもの、人間関係によるもの、環境によるもの等がある。これらの3つの要因の組み合わせにより、不適応の型は、次の図4のように、4つの型に分類されるであろう。